イスラエル考古学研究会

ニュースレター

No. 7

2009 年 2 月

テル・レヘシュ遺跡第 4 次発掘調査

長谷川　修一

テル・レヘシュ遺跡の第 4 次発掘調査は 2008 年 8 月 3 日～ 29 日にかけて行われた。各地区の発掘の状況は以下のとおり（図 1）。

1.「アクロポリス」地区（C4、D4、E4、E5 区）

D4- ①区では、2007 年までの調査でアクロポリス部を囲んでいると思われる幅の広い壁が検出されていた。今年度は調査区を西側に拡大すると同時に、深く掘り込んだところ、アクロポリス周壁の延長部分が確認され、また、より下層に少なくとも 2 層が確認された（第 II 層＝鉄器時代 II-I 期／第 III 層＝鉄器時代 I 期？）。最下層下では一部岩盤に達した。周壁の年代は不明だが、共伴する土器から、鉄器時代 II 期が想定される（第 I 層）。

D4- ②区は前年に引き続いてさらに掘り込んだところ、岩盤に達した。岩盤直上の礫層からは前期青銅器時代の土器片が出土した。

D4- ③区はアクロポリス周壁をテルの東側で確認するために新たに設定された。D4- ①区で確認された周壁とほぼ一直線を成す、同幅の壁が表土直下で検出された（図 2）。また、同壁の北側に、それと並行する格好で同幅の壁が検出された（第 I 層＝鉄器時代 II 期？）。この壁に垂直方向に接合する石敷きの床面らしいものが検出され（第 II 層＝鉄器時代 II 期？）、さらにその下層にも類似の遺構が確認された（第 III 層＝鉄器時代 II 期？）。これら床面と周壁との関係は未解明である。さらに下に 2 層が確認され（第 IV 層＝鉄器時代 I 期？／第 V 層＝鉄器時代 I 期）、最下部ではプラスター張りの床面が確認された（第 VI 層＝後期青銅器時代～鉄器時代 I 期）。

2. 南斜面地区（D6- ①区、C5 区）

〔前号では「南テラス」地区〕D6- ①区では昨年に検出されていた後期青銅器時代の遺構の下を掘り進めたところ、岩盤に達した。南斜面の西側にテルの周壁を探すことを目標に調査区が新たに設定された（C5 区）。後期青銅器時代から鉄器時代 II 期ま

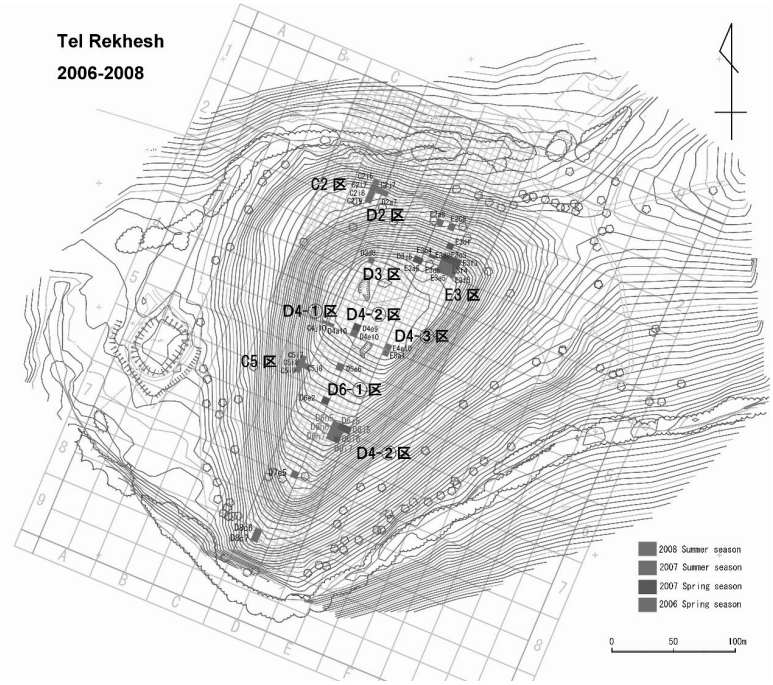

図 1　発掘調査区の位置

図 2　アクロポリスの調査区（D4- ③区）

での３層が確認され、後期青銅器時代の遺構からはガラス製のビーズ１個が出土した（図 3）。

3. 東斜面上縁地区（D6- ②区）

〔前号では「東側城壁地区」〕同地区では昨年の調査までに鉄器時代I期の大型建物が検出されていた。

図 3　ガラス製のビーズ

今回はこの建物の床面の一部が掘り下げられた。ここではすでに円形遺構１基と玄武岩製の石柱状の遺物が検出されていたが（後期青銅器時代 II 期）、今年度の発掘では新たに２基の円形遺構が検出され、そのうち１基はほぼ完全な状態で出土した（図 4 ／直径約 2m、壁の高さ約 80cm）。遺構内部の床の南端部には石鉢が埋め込まれており、切り石が敷かれた床面はこの鉢に向かい微傾斜していた。液体が床面を伝わって鉢内に溜まる構造と見られる。同様の遺構はイズレエル平野周辺のいくつかの遺跡で出土しており、オリーブの搾油施設として報告されている。また、遺構内部から採取された土中からオリーブの種子が出土したこと、付近からオリーブの実の破砕に用いたと考えられる石製ローラーが見つかっていることから、本遺構もオリーブ搾油施設であった可能性がある。同遺構は鉄器時代 I 期の大型建物が焼失するまで使用されたと考えられる。

搾油施設遺構の北側で中期青銅器時代の床面の下から２基の甕棺墓が出土した。ひとつは幼児の埋葬で、遺体は上部が壊された壺にテル・エル・ヤフディエ様式の小型水差形土器とともに収められていた。もうひとつは乳児の埋葬と思われ、遺体は頸部を切断した壺に収められ、やはり小型水差形土器が副葬されていた（骨はいずれも分析中）。この時期に典型的な幼児の埋葬方法である。その下層からはさらに、石列と共に前期青銅器時代 III 期の土器が大量に出土したが、遺構の性格は不明。

4.「城門」地区（E3 区）

テル上部のアクロポリス部への入り口を確認するため、すでに確認されていた大型の方形建物の周囲を発掘した。昨年度、南北方向の石壁に２つの突出部が直角に接合した建築遺構を検出していたが、今年度は３つ目の突出部が上述の２つの突出部と並行する形で検出された（図 5）。これらの突出部によって建物は南北に並ぶ５メートル四方の部屋２つからなることがわかった。このうち、南側の部屋からは２つの時期の床面が検出された。この遺構の平面図から、南レヴァントにおける中期青銅器時代の典

図 4　後期青銅器時代の円形遺構（D6- ②区）

図 6　女性の顔のついた石製容器脚部（E3 区）

型的な市門が想像されるが、同時代の遺物は確認されなかった。市門だとすれば、同遺構は中央通路の東側部分と同定される。後期青銅器時代から鉄器時代 I 期の遺物が遺構に関連して出土しているが、南レヴァントでは後期青銅器時代の市門の例は稀なため、建築の年代を決定するにはさらに慎重な調査が必要である。

同遺構の西側では排水溝の設けられた敷石が検出された。この敷石は市門の中を通る通路であった可能性がある。敷石の西側は残存状況が悪く、市門の西部分を明確に確認することはできなかった。これらの遺構の周囲からは前期青銅器時代の遺物が出土している。また、この地区では表土から人間の女

図 5　北東コーナー地区（E3 区）

性の顔をあしらった石製容器の脚部断片が出土した（図 6）。

5.「北のテラス」地区（C2 区、D2 区）

テラス部の居住層を確認するために北のスクエア内に深いトレンチを設けた。その結果、中期青銅器時代から鉄器時代 I 期までの６つの文化層が検出され、最下部で岩盤に達した。

また、昨年検出した建築遺構の南に新たに設けた調査区からは、表土下で建築遺構が検出された。遺構内部の部屋からは２時期の床面が検出され、上層の床面直上で注口付き調理用鉢と小型水差しが完形で出土した。さらにその床面下からは２つのほぼ完形の祭儀用器台を含む鉄器時代 I 期の土器が複数出土した（図 7）。

さらに、昨年の２つの調査区の間に新たに調査区を設けたが、そこからは赤色スリップが施されたテラコッタ製の人面の下半分が出土した（図 8）。同面には眼窩が穿たれ、また、鬚を表現する小円形の型押しが顎部に施されていた。なお、類例はフェニキアのサレプタで出土している。また、同地区からは、未使用または模造と思われる青銅製鎌刃が出土した。

6.「アクロポリス北」地区

アクロポリス部ではローマ時代の遺物が大量に採集され、それに関連すると思われる大型の建築遺構も地表に露出している。今回、その地上に露出している建築遺構の測量を行った結果、アクロポリスに所在する建築群のプランがほぼ明らかになった（図 9）。その後、同遺構の年代を精査するためアクロポリス部の北端近辺に新たに調査区が設けられた。これらの遺構の正確な年代決定は今後の調査を待たねばならない。

図 7　祭儀用器台（C2 区）

図 8　土製人面（C2 区）

まとめ

以下に、今年度の調査で明らかになった点を時代ごとに列挙する。

前期青銅器時代――今年度、３地区で岩盤に到達した。岩盤直上の層から前期青銅器時代の遺物が出土することから、テルに最初に人が居住するようになったのは前期青銅器時代であったと考えられる。ただし、この時代に属する明確な建築遺構は未確認であるため、今後の調査が待たれる。

中期青銅器時代――テル下段テラス面（「北のテラス」）のトレンチ最下部で遺構が検出された。また、東斜面上縁地区では埋葬遺構が検出された。

後期青銅器時代――明確な遺構は南斜面・東斜面上縁地区（南のテラス地区、東側城壁地区）に集中している。東斜面上縁地区のオリーブ搾油施設がその代表例で、同時代の産業の一端が窺える。

鉄器時代 I 期――テル下段のテラス（「北のテラス」）部分から、祭儀的性格を連想させる同時代の

遺物が多く出土することから、こうした遺物を使用、保管していた遺構の存在が想定される。この他、テル北東コーナー地区、東斜面上縁地区、アクロポリス地区とこの時期居住範囲は最大となっていた。

鉄器時代Ⅱ期――アクロポリス部を囲む幅 1.2m の周壁がこの時代に属するものと考えられる。同時代の遺物がテル下段からはほとんど出土しないことから、テルの上段のみが要塞として利用されていたことが想像される。これ以降、テルの上段以外に人が住むことはなくなったと思われる。

アケメネス朝ペルシャ時代――テル上段の調査区からピットを含む遺構が数基確認されている。

初期ローマ時代――アクロポリス部の建築遺構群がこの時代に属することが予想されるが、その性格解明は今後の発掘を待たねばならない。

（テル・アヴィヴ大学大学院）

今シーズンの参加者は以下のとおり――月本昭男（団長・立教大学）、置田雅昭、桑原久男（天理大学）、杉本智俊（慶應義塾大学）、山内紀嗣、日野宏、巽善信、飯降美子（天

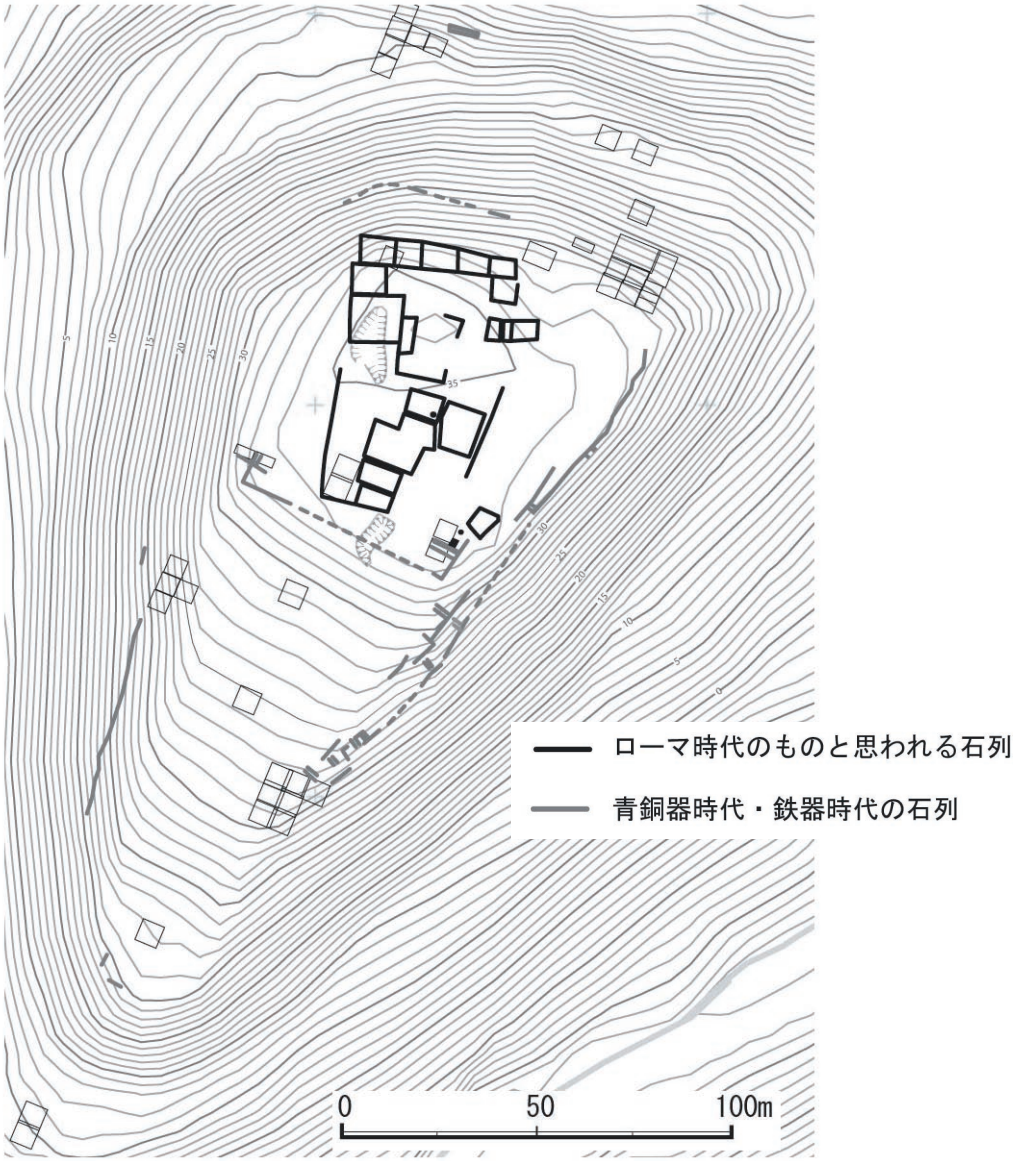

図 9　アクロポリス上に広がる建築遺構平面図

理大学付属天理参考館)、イム・ソング(韓国監理教大学)、宇野隆夫(国際日本文化研究センター)、宮田絵津子(サンティアゴ・デ・コンポステラ大学大学院)、津本英利(マールブルク大学大学院)、長谷川修一(テル・アヴィヴ大学大学院)、山吉智久、山野貴彦(テュービンゲン大学大学院)、小野塚拓造(筑波大学大学院)、山藤正敏(早稲田大学大学院)、千巌ふみ(同志社大学大学院)、小林由弥、中野晴生(写真家)、イツィク・パズ(ベイト・ベール大学)、ニル・オルタルほか、日本・韓国・イスラエルからのボランティア学生、社会人ボランティア、遺跡近郊のミスル村の労働者たち。

参考文献

桑原久男「テル・レヘシュの第一次発掘調査」『古事』(天理大学考古学・民族学研究室紀要)第10号 2006年34-41頁

桑原久男「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡2007年(第2次・第3次)発掘調査」『第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会編 2008年97-102頁

日野宏・巽善信「イスラエル国テル・レヘシュ 第一次発掘調査」『第14回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会編 2007年82-87頁

日野宏「イスラエル国テル・レヘシュ遺跡第1・2次調査」『天理参考館報』第20号 天理大学出版部 2007年35-44頁

Paz, Y. and Kuwabara, H., "The First Season of Excavation at Tel Rekhesh: The Preliminary Stage (15-27th March 2006)", *Orient Express* 2007/1-2, 2007,17-25.

論　考

都市とは何か(3)

巽 善信

東京大学などによる日本アンデス考古学発掘調査団がペルーで調査を開始して昨年で50年となった。この調査に長く関わってきた、国立民族学博物館の関雄二は第21回浜田青陵賞を受賞している。その受賞記念シンポジウムで関は次のように述べている。「遺跡の調査成果から私たちは、集団がイデオロギーを目に見えるものにするために神殿を築き、より大きく立て替えを繰り返すうちに労働力の統御や食料増産が促され、これをつかさどるリーダーが誕生した、という『神殿更新説』を生み出した。私はこの説を一歩進め、彼らが祭祀に使われる様々な道具の材料を入手するために物資の交易を掌握し、階層の文化が進んで社会が複雑化した、と考えている」(「第21回浜田青陵賞シンポ『国家』誕生のなぞにせまる—神殿と古代王権」朝日新聞〔大阪〕2008年10月3日付朝刊)。まず神殿ありきという関の考えは、まず経済ありきとする史観へのアンチテーゼでもあろう。これは「神話と理論、つまり世界概念が成立すれば、後はその実体化としての空間造りが始まる」とした筆者の都市成立の考えと一致する。都市が誕生する状況は地域により異なるが、最初期では基本的には精神的支柱とも言えるイデオロギーすなわち世界概念が核としてあって初めてできあがるものだと筆者は考えている。

農耕が主産業であった古代においても、都市では祭祀や交易など農耕以外に関わる人の割合が高かったようだ。現在風に言えば、第二次産業や第三次産業に従事する人が多かったのである。つまり単純に農耕しながら徐々に人が増えて、村から都市になるというのは考えにくい。村から都市になるには農耕共同体以上の要因が必要である。人口が増えれば、重労働である農作業を比較的大規模に行える。したがって農耕が発展して行く上では人口の増加、すな

わち労働力の増加は好ましい。しかし古代の農耕技術から考えて、人口がある程度増えれば、より広い農地すなわち別の農地を求めて、人は拡散して行くのが自然な流れであって、狭い一個所に人口密度を上げて行く利点は直接にはない。一定の大きさの土地の生産力はある程度決まっており、現代のように農業技術が革新的に発展しない限り飛躍的な生産力の増大は見込めない。ある一定の大きさの農地が養える人口は限られてくるのである。当時の主産業である農耕がそうであるのだから、人口密度の高い多くの古代都市は自然な存在と言うよりは、むしろ異様な存在と言える。異様な存在・都市が成立するためには、精神的支柱や交易など都市を支える背景が必要となる。特に精神的支柱とも言える世界概念は重要である。川辺に沿ってほぼ 4 km おきに営まれていた新石器時代の農耕集落の中で、やがてそのうちの 1 つの規模が大きくなり、その中心に立派な神殿が建てられるようになるのもこうした要因による。この中心的な集落には世界概念の核があったと考えられ、その求心力が組織力につながり、世界概念の実体化に向けて力を集中させて、大きな都市へと発展させて行ったのではないだろうか。つまり、たとえばメソポタミア平原で、世界概念的な位置で中心的な役割を担うことで組織力を持つようになったある大きな集落があったとすると、そこを中心として灌漑を行うことで生産力が伸びることになる。余剰生産物と交換で必要な物資（たとえば神殿を綺麗に飾り付けるものなど）を遠方より手に入れることで、広大な交易ネットワークを形成して行く。そうして次第に大きな中心的都市へと変化するのである。そしていかに大きな都市に成長しようとも、異様な存在であるがために、その背景がなくなると突如として消え去るものでもあった。

しかし第 3 次産業を主産業とする現在においては、都市はこれまでになかったほど社会に合った形態と言える。建築家隈研吾は 20 世紀と 21 世紀の都市を次のようにとらえている（「建築家隈研吾さんに聞く」朝日新聞〔大阪〕2008 年 12 月 26 日付朝刊）。20 世紀の都市再開発のモデルはニューヨークのロックフェラーセンターであり、そびえ立つ超高層ビルは足下には収益の見込める商業施設があり、文化施設で色を付けた、採算を合わせる最適の道具であった。つまり資本主義の欲望を満たす典型的なパッケージであった。21 世紀の再開発は 20 世紀型を克服するものでないといけないとする隈は、21 世紀型の再開発は「地面に戻る、地面を大事にする」ことを基本として考えることを提唱する。例として隈が提案し採用されたブダペスト西駅地区再開発案をあげている。これは歴史ある駅舎を残し、線路を地下化して地上は緑地にし、文化、商業施設を点在させるものである。隈は「この 20 年ほどでしょうか、人間は光と風を感じる空間で生活したいと感じ始めています」と述べている。都市は今も国家の影響下にあることは間違いないが、先進国では個人消費が国内総生産の過半数（日本は約 6 割）を占める現在、消費者の意向を都市は無視できない。人工的自然化の貫徹が都市の自己目的であれば、資本の意向ではなく、消費者の意向を取り入れることで都市は新たな段階を迎えるはずである。それは「自然より自然な人工的自然」の創出につながる。大阪梅田の再開発に関して聞かれた隈は次のように答えている。「大阪といえば淀川がある。水の都という文化がある。……といって、堤防をつくって淀川から水を引っ張るなんてのは 21 世紀型ではない。人間的な感覚で水と接する機会を設ければいい。やり方は色々あると思います」。

国家よりはるか以前に成立していた都市は、それ故に国家の枠組みから超えて発展して行く可能性がある。もちろん 100 年、1000 年の時間単位の話である。いかに過去に遡れるかは、いかに未来を獲得できるかにつながっているはずである。都市のとらえ方には諸説あるが、筆者は経済や環境など外的要因より、世界概念などの内的要因を重視して考えてみた。（終）

□ 第 10 回イスラエル考古学研究会・報告 □

2008 年 12 月 20 日（土）
於 : 八王子市 北野南部会館

発　表

長谷川修一「テル・レヘシュ遺跡第 4 次発掘調査報告」

小野塚拓造「テル・レヘシュ遺跡で検出された後期青銅器時代 II 期～鉄器時代 I 期の搾油施設」

山藤正敏「前期青銅器時代パレスティナ地域における地域性──土器生産・流通体制の変遷について──」

◇ 天 理 参 考 館 ◇ 第 60 回 企画展 ◇

テル・ゼロール遺跡

──日本調査隊の軌跡──

2009 年 4 月 8 日～ 6 月 8 日

於 : 天理参考館 企画展示室

後援 : 日本オリエント学会、日本西アジア考古学会

1960 年代に発掘されたテル・ゼロール（イスラエル）からの出土物展示を中心に、日本の発掘隊による考古学調査を公開セミナー、講演会で振り返ります。現在も多くの日本調査隊がオリエントで発掘調査を行っています。公開セミナーでは 4 名の方を講師に迎え、発掘成果を基にそれぞれの遺跡の都市的性格を紹介していただきます。講演会では本研究会会長、金関恕先生にテル・ゼロール発掘当時のお話を伺います。1960 年代という激動期に海外での発掘に情熱を注いだ先生のお話は、100 年に 1 度ともいわれる経済的な危機の中で行われる海外での発掘調査にも大きな示唆を与えてくれるでしょう。

公開セミナー

「古代オリエントの都市遺跡 ──日本調査隊の活躍──」

日　時　4 月 11 日（土）13:00 ～ 16:00

主　催　日本西アジア考古学会、天理参考館

講　師

山内 紀嗣（天理参考館学芸員）

「オリーブ油の町 テル・レヘシュ遺跡」

長谷川 奏（早稲田大学総合研究機構准教授）

「古代エジプトの都市をめぐる伝統と革新──メンフィスとアレクサンドリア──」

芳賀 満（京都造形芸術大学教授）

「中央アジアのギリシア系都市を掘る──ウズベキスタン共和国カンピール・テパ──」

西藤 清秀（奈良県立橿原考古学研究所埋蔵文化財部長）

「シリア・パルミラ遺跡の墓を掘る」

講 演 会

「テル・ゼロール発掘の思い出」

講 師　金関 恕（天理大学名誉教授）

日 時　5 月 9 日（土）13:30 ～ 15:30

お問い合わせは天理参考館まで（〒 632-8540 奈良県天理市守目堂町 250 番地 TEL: 0743-63-8414）

URL ⇨ http://www.sankokan.jp/

編 集 後 記

○不定期刊の様相を呈しているのではないかと不安になっておりましたが、夏は 7 ・ 8 月、冬は 2 月が発行の目安になってきました。次号は研究会での発表を多く掲載する予定です。　（Mi.）

●●● 目　次 ●●●

テル・レヘシュ第四次発掘調査　長谷川 修一　1
論 考　都市とは何か（3）　巽 善信　6
お知らせ　8
編 集 後 記　9

イスラエル考古学研究会 ニュースレター　No. 7
2009 年 2 月 25 日
編　集 : 巽 善信　宮崎 修二
発　行 : イスラエル考古学研究会

〒 632-8510
奈良県天理市杣之内町 1050 番地
天理大学文学部　考古学・民俗学共同研究室内
e-mail: israelkai@yahoo.co.jp
郵便振替口座
00960-3-79256　イスラエル考古学研究会